

四国における看護師の自己教育力の現状
～年齢および経験年数からの検討～

橋本結花 橋本和子

高知大学医学部看護学科 〒783-8505 高知県南国市岡豊町小蓮

Present status of self-education ability of nurses in Shikoku

Yuka HASHIMOTO Kazuko HASHIMOTO

KOCHI UNIVERSITY Kohasu, Oko-cho, Nankoku-City, Kochi, 783-8505

Abstract

The purpose of this study was to clarify the present status of the self-education ability of nurses working in general hospitals in Shikoku. A self-described questionnaire survey by mail was performed, and responses were obtained from 386 nurses (effective response rate, 54.8%). Analysis of the results showed the highest mean value for "orientation to growth/development" among 4 categories of self-education ability and a lower mean value for "confidence/pride/stability" than the mean values for the other categories. The total score on the scale was correlated with age as well as the duration of experience (years), but some subscales were not associated with these factors. This study suggested the necessity for continuing education in accordance with individual ability.

Key words: self education ability, continuing education

キーワード：自己教育力、継続教育

緒言

医療職を取り巻く環境が劇的に変化する中、看護職は質の高い看護を提供するために生涯にわたる学習が必要である。しかし、松岡¹⁾は、「個々の看護師の教育については一考が必要と思われる。なぜならば、同年齢、同勤務年数であっても能力には個人差がある。しかし、現在の教育（研修）の方法は、勤務年数による集合教育をとっているところがほとんどである。」と述べている。看護師として学ぶべき知識・技術が増大している現在では、年齢や経験年数のみならず、個人の能力や資質を踏まえた、新たな卒後教育のあり方を探る必要があると考えられる。そのためには、まず看護師の持つ個人の能力・資質を明らかにしていく必要があると考えた。

目的

本研究の目的は、看護師の持つ能力の一つである自己教育力の現状を明らかにし、新たな継続教育プログラム作成の基礎資料とすることである。

研究方法

1. 用語の操作的定義

本研究においては自己教育力を、「人々が主体的に学ぶ意志、態度、能力であり、生涯を通じて学んで生きようとする渇きともいえる力」と定義した。

2. 研究デザイン

質問紙法でデータを収集する量的研究デザイン

3. 研究対象

対象者選定にあたっては、無作為に選んだ四国4県（香川県、徳島県、愛媛県、高知県）の総合病院の所属施設長及び看護部長に、研究依頼書や使用する質問紙を送付した。研究依頼を16施設に送付し、10施設（独立行政法人国立病院機構や公立の総合病院6施設、私立の総合病院4施設）から協力が得られるとの回答を得た。本研究では、この研究協力の得られた総合病院に勤務する看護師674名を対象とした。

4. 調査期間

2004年6月10日～2004年8月12日

5. 調査方法

協力が得られた施設の看護部長または教育や研究の担当者に、質問紙の配布を一任した。個別の封筒に、研究の主旨、プライバシーの保護等の説明文を添えた自記式無記名質問紙を入れた。封筒には、返信用封筒を同封し、郵送法での回収とした。

6. 測定用具

自己教育力の測定には、梶田²⁾が作成した30項目の自己教育性測定尺度をもとに、西村³⁾らが追加を行なった看護婦の自己教育力尺度(以下自己教育力尺度とする)を用いた。質問は計40項目であり、各項目は「はい」に2点、「いいえ」に1点の2件法で回答する。その中で11項目が逆転項目である。尺度の使用にあたり、西村に研究者本人が電話をして使用の同意を得た。他に、性別、年齢、看護師経験年数の属性を加え(表1)質問紙を作成した。

表1 測定形式

変数	項目数	測定形式及び得点配分		得点範囲
性別	1		①男性 ②女性	
年齢	1		直接数字を記入	
看護師経験年数	1		直接数字を記入	
自己教育力尺度				
Ⅰ. 成長・発展への志向	10	2件法	2. はい(2点) 1. いいえ(1点)	40~80
Ⅱ. 自己の対象化と統制	10			
Ⅲ. 学習の技能と基盤	10			
Ⅳ. 自信・プライド・安定性	10			

7. 分析方法

各質問項目の記述統計量を求めた上で、分析を行なった。分析には、Kolmogorov-Smirnov の 1 サンプル検定、Kruskal Wallis 検定、Bonferroni の修正による多重比較、Spearman の順位相関係数を用いた。欠損値の扱いは、基礎統計量や要因間の相関時はペア毎に欠損値の処理を行い、Kruskal Wallis 検定時には、リストごとに除外する作業を行った。統計ソフトは、SPSS Base 11.5J for Windows を使用した。

8. 倫理的配慮

倫理的配慮として、研究の目的、方法、研究への協力の有無により不利益が生じないこと、得られた結果は適正に管理すること、不明点の問合せ先等を全対象者に文書で添付した。質問紙は無記名で回収し、個人や施設が特定されない旨も明記した。回収には個別の封筒を用意し、プライバシーを保護するようにした。さらに、研究への自由参加の意思を最大限尊重するため、郵送法での回収とした。

結果

1. 対象者の背景

対象者 674 名のうち 396 名から回答を得た。回収率は 58.7% であった。このうち、基本属性の記入が不備なものや、回答の記載が無い質問紙 23 名分を除外し、予備調査で得られたものをあわせ、386 人を分析対象とした。性別は、男性 13 名 (3.4%)、女性 373 名 (96.6%) であった。男性からの回答が少数であったため、男女を分けずに分析を行なった。年齢の平均は、 37.3 ± 9.3 歳、経験年数の平均は 14.6 ± 9.0 年であった。(表 2)。

表2 対象者の基本属性 N=386

基本属性	人数 (%)	平均値±SD	最小値	最大値	範囲
性別					
男性	13 (3.4)				
女性	373 (96.6)				
年齢		37.3 ± 9.3	21	61	40
経験年数		14.6 ± 9.0	0.17	38	37.83

2. 尺度の信頼性・妥当性

自己教育力尺度の得点分布の正規性を確認するために、合計得点をグラフ化し、さらに Kolmogorov-Smirnov の 1 サンプル検定を行った。Kolmogorov-Smirnov の 1 サンプル検定では、4 つの下位尺度において、すべて分布の差がみられた。しかし、合計得点には分布の差はみられなかった。Cronbach's alpha 係数は、0.68 であった。

3. 自己教育力得点の回答と特徴

自己教育力全体の得点は 51~77 点の範囲で、平均値は 63.17 点 (SD=4.69) であった (表 3)。下位尺度の平均値は、成長・発展への志向が最も高く、自信・プライド・安定性が最も低かった。40 項目の質問に対する回答状況をみると、欠損値が一番多かったのは、項目 38 の「生まれ変わるとしたら、やはりいまの自分に生まれたい」で、欠損人数は 4 名であった (表 4)。

表3 自己教育力尺度の記述統計量

N=386

尺度および下位概念	平均値	SD	最小値	最大値	範囲
自己教育力得点					
I. 成長・発展への志向	17.20	1.92	11	20	9
II. 自己の対象化と統制	16.12	1.55	12	20	8
III. 学習の技能と基盤	15.06	2.05	10	20	10
IV. 自信・プライド・安定性	14.70	1.62	10	18	8
合計得点	63.17	4.69	51	77	26

表4 自己教育力尺度の回答率

N=386

下位項目	はい	%	いいえ	%	欠損数
I. 成長・発展への志向					
1 自分の考えを最大限に伸ばすよう、いろいろ努力したい	346	89.6	40	10.4	0
2 たとえ認められなくても、自分の目標に向かって努力したい	334	86.5	50	13.0	2
3 自分でなければやれないことをやってみたい	299	77.5	86	22.3	1
4 自分がやり始めたことは、最後までやりとげたい	348	90.2	38	9.8	0
5 将来、他の人から尊敬される人間になりたい	271	70.2	115	29.8	0
6 これからもよい仕事をし、多くの人に認められたい	300	77.7	85	22.0	1
7 これから専門的な資格や学位などをとりたい	214	55.4	172	44.6	0
8 一体何のために勉強するのだろうか、といやになることがある★	198	51.3	187	48.4	1
9 ぼんやりと何も考えず過ごしてしまうことが多い★	196	50.8	189	49.0	1
10 人の一生は結局偶然のことで決まると思う★	281	72.8	104	26.9	1
II. 自己の対象化と統制					
11 自分のよくないところを自分で考え直すよう、いつも心がけている	385	99.7	89	23.1	1
12 自分の考えや行動が批判されても腹をたてない	113	29.3	273	70.7	0
13 自分の良い所と悪いところがよくわかっていて、努力したい	317	82.1	67	17.4	2
14 他の人から欠点を指摘されると自分でも考えてみようとする	368	95.3	18	4.7	0
15 できるだけ自分を押さえて、他の人に合わせようとしている	254	65.8	131	33.9	1
16 腹が立ってもひどいことをいったりしないように注意している	353	91.5	33	8.5	0
17 疲れている時には、何もしたくない★	31	8.0	355	92.0	0
18 テレビを見てしまっ、勉強がやれないことが多い★	174	45.1	211	54.7	1
19 ちょっといやなことがあると、すぐに不機嫌になる★	252	65.3	132	34.2	2
20 いやになった時でも、もうちょっとだけ、もうちょっとだけと頑張ろうとする	247	64.0	139	36.0	0
III. 学習の技能と基盤					
21 自分の調べたいことがある時に、図書館(室)を利用している	144	37.3	242	62.7	0
22 自分の調べたいことについて文献検索していくことができる	224	58.0	161	41.7	1
23 他の人の話を聞いたり本を読むとき、内容を振り返りまとめてみる習慣がある	122	31.6	263	68.1	1
24 考えを深めたり、広げたりするのに話し合いや討議が有効であると考えている	353	91.5	33	8.5	0
25 考えていることを筋道をたてて書いたり、伝えたりできる	157	40.7	229	59.3	0
26 たとえ話などをもちいて人にわかりやすく、説明するのが苦手である★	139	36.0	247	64.0	0
27 自己評価をする時は、自分の目標に照らし合わせて行っている	267	69.2	119	30.8	0
28 自分に必要な文献や記録を分類・整理しておく習慣がある	129	33.4	256	66.3	1
29 わからないことがあると、すぐ人に聞くのが効率的と思う	177	45.9	209	54.1	0
30 取り組みたいことによってそれによって学習方法や手続きを選べる	244	63.2	141	36.5	1
IV. 自信・プライド・安定性					
31 今のままの自分ではいけない、と思うことがある★	31	8.0	354	91.7	1
32 ほかに人にばかにされるのは、がまんできない	221	57.3	165	42.7	0
33 時々、自分自身がいやになる★	304	78.8	82	21.2	0
34 何をやってもだめだとおもう★	287	74.4	99	25.6	0
35 自分のことを恥ずかしいと思うことがある★	127	32.9	259	67.1	0
36 今の自分が幸福だと思う	143	37.0	242	62.7	1
37 自分のやることに自信を持っているほうだと思う	170	44.0	215	55.7	1
38 生まれ変わるとしたら、やはり今の自分に生まれたい	142	36.8	240	62.2	4
39 今の自分に満足している	94	24.4	292	75.6	0
40 自分にもいろいろとりえがあると思う	303	78.5	82	21.2	1

★：逆転項目を示す

4.自己教育力得点と年齢の特徴

はじめに、自己教育力尺度における得点と年齢の関連を、Spearman の順位相関係数を用いて検討した(表5)。その結果、自己教育力合計得点は有意水準5%において、相関が認められた。しかし、下位尺度においては、自己教育力の「成長・発展への志向」「自信・プライド・安定性」では、相関がみられなかった。

次に、年齢の違いによる各尺度の得点差を検討した。年齢を20代前半から50代以上の7群に分け、分析を進めた(表6)。分析には、Kruskal Wallis 検定を用いた。その結果、自己教育力の下位尺度「学習の技能と基盤」において有意差が認められた(表7)。有意差が認められた自己教育力の下位尺度「学習の技能と基盤」については、Bonferroni の修正(有意水準 $P < 0.0071$)による多重比較を行い、年代による得点の差を明らかにした(表8)。

表5 得点と年齢の相関 N=386

尺度および下位尺度	年齢との相関
自己教育力得点	
Ⅰ. 成長・発展への志向	.057
Ⅱ. 自己の対象化と統制	.117 *
Ⅲ. 学習の技能と基盤	.182 **
Ⅳ. 自信・プライド・安定性	.099
合計得点	.117 *
Spearmanの順位相関係数	** $P < 0.05$, *** $P < 0.01$

表6 対象者の年齢と経験年数 N=386

群	人数(n)	平均年齢±SD	平均経験年数±SD
1 20代前半	40	23.9±1.3	2.6±1.5
2 20代後半	74	28.1±1.5	6.3±2.2
3 30代前半	66	33.1±1.4	11.0±2.9
4 30代後半	72	38.4±1.4	15.5±3.8
5 40代前半	49	43.0±1.4	19.9±4.3
6 40代後半	46	48.0±1.3	23.7±5.3
7 50代以上	39	54.1±2.3	29.4±4.7

表7 年齢別による自己教育力得点 N=386

尺度および下位概念	20代前半		20代後半		30代前半		30代後半		40代前半		40代後半		50代以上		統計量
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	
自己教育力得点															
Ⅰ. 成長・発展への志向	18.05	1.52	16.93	2.14	16.97	2.08	17.17	1.93	17.33	1.41	17.09	2.13	17.28	1.69	.111
Ⅱ. 自己の対象化と統制	16.05	1.48	16.09	1.51	16.12	1.60	16.03	1.62	16.55	1.57	16.13	1.49	16.77	1.48	.086
Ⅲ. 学習の技能と基盤	14.00	1.45	14.82	2.10	14.86	1.88	15.42	2.19	15.37	2.16	15.33	2.02	15.54	2.06	.004 *
Ⅳ. 自信・プライド・安定性	14.15	1.75	14.62	1.73	14.65	1.45	14.86	1.56	14.73	1.59	14.83	1.57	15.00	1.69	.284
合計得点	62.25	3.57	62.47	5.37	62.61	4.23	63.47	5.45	63.98	4.33	63.37	4.37	64.59	4.05	.277

Kruskal Wallis検定

* $P < 0.05$

表8 自己教育力の下位尺度「学習と技能と基盤」 年齢による多重比較

	20代前半	20代後半	30代前半	30代後半	40代前半	40代後半	50代以上
20代前半		.037	.016	.001 *	.003 *	.001 *	.000 *
20代後半			.819	.115	.203	.141	.064
30代前半				.163	.270	.183	.082
30代後半					.879	.947	.669
40代前半						.976	.635
40代後半							.792
50代以上							

Bonferroniの修正による多重比較

* $P < 0.0071$

5.自己教育力得点と経験年数の特徴

まず、自己教育力得点と経験年数の関連を、Spearmanの順位相関係数を用い分析した(表9)。自己教育力合計得点には有意水準5%において、相関が認められた。しかし、下位尺度においては、自己教育力の「成長・発展への志向」「自己の対象化と統制」では、相関がみられなかった。

次に、経験年数による各尺度の得点差を検討した。経験年数を5年間隔で6群に分け(表10)、差の検討を行なった(表11)。Kruskal Wallis検定を用いて検討を行なったが、自己教育力尺度の合計得点で有意の差は見られなかった。しかし、下位尺度の「学習の技能と基盤」においては、有意の差が認められた。そのため、有意の差が確認された下位尺度の「学習の技能と基盤」においては、Bonferroniの修正による多重比較を行なった(表12)。有意水準 $P < 0.0083$ の際に仮説が棄却される。その結果、経験年数6年以上の群間では、有意の差は見られなかったが、経験年数5年未満と16年以上の群間で有意の差が認められた。

表9 得点と経験年数の相関 N=386

尺度および下位尺度	経験年数との相関
自己教育力得点	
I. 成長・発展への志向	.029
II. 自己の対象化と統制	.097
III. 学習の技能と基盤	.185 **
IV. 自信・プライド・安定性	.107 *
合計得点	.113 *
Spearmanの順位相関係数 * $P < 0.05$, ** $P < 0.01$	

表10 対象者の経験年数 N=376

群	人数 (n)	平均年齢±SD
1 5年以下	73	3.18±1.59
2 6年～10年	77	8.09±1.54
3 11年～15年	57	13.07±1.28
4 16年～20年	72	17.99±1.52
5 21年～25年	47	23.30±1.58
6 26年以上	50	29.94±2.58

表11 経験年数による自己教育力得点 N=376

尺度および下位概念	5年以下		6年～10年		11年～15年		16年～20年		21年～25年		26年以上		統計量
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	
自己教育力得点													
I. 成長・発展への志向	3.18	1.59	16.91	2.21	17.02	2.08	17.28	1.79	17.38	1.69	17.00	1.96	.341
II. 自己の対象化と統制	17.66	1.61	16.32	1.68	15.86	1.56	16.50	1.43	16.23	1.59	16.36	1.56	.165
III. 学習の技能と基盤	16.00	1.48	14.97	2.13	14.75	2.14	15.68	2.03	15.34	1.98	15.30	2.10	.002 *
IV. 自信・プライド・安定性	14.37	1.65	14.73	1.61	14.60	1.45	14.86	1.59	15.00	1.57	14.78	1.69	.258
合計得点	62.32	1.71	62.94	4.97	62.23	4.99	64.32	4.91	63.96	4.19	63.44	4.63	.130
Kruskal Wallis検定													* $P < 0.05$

表12 自己教育力「学習と技能と基盤」 経験年数による多重比較

	5年以下	6年～10年	11年～15年	16年～20年	21年～25年	26年以上
5年以下		.078	.358	.000 *	.008 *	.007 *
6年～10年			.581	.040	.362	.328
11年～15年				.013	.164	.175
16年～20年					.301	.358
21年～25年						.924
26年以上						
Bonferroniの修正による多重比較 * $P < 0.0083$						

考察

1. 対象者の概要について

対象者の性別は、男性が全体の3.4%（13人）であり、対象看護師の大半は女性であった。男性看護師も徐々に増加しているが、看護の現場ではいまだ圧倒的に女性が多い環境と言える。平均年齢は37.3歳、平均経験年数は14.6年と長かった。今後は、性差による自己教育力の検討等も望まれると考えるが、現時点での本研究の結果は、基礎的資料としての意義があると考えられる。

2. 自己教育力尺度の信頼性・妥当性

Kolmogorov-Smirnov の1サンプル検定では、4つの下位尺度において、すべて分布の差がみられた。しかし、合計得点には分布の差はみられなかった。よって、合計得点においては、正規性があると考えられる。尺度全体のCronbach's alpha係数は、0.68であることから、尺度の信頼性は問題ないと判断した。

3. 自己教育力尺度の得点

自己教育力尺度の4側面において「成長・発展への志向」の平均値が最も高く、「自信・プライド・安定性」の平均値が他の側面と比して低いとの結果が得られた。一般に看護師は国家資格を与えられた専門職であるため、技術的・知識的にも仕事に関する自信やプライドは十分にもっていると考えられる。しかし、結果からは、「今の自分に満足していない、今の自分ではいけない」と考える看護師が多く、「成長したい」と考える看護師が多いと言えるのではないかと考える。

また、各側面の相関をみると、「成長・発展への志向」および「学習の技能と基盤」と「自信・プライド・安定性」の側面で相関がみられた。「自信・プライド・安定性」は、個人を前進させるのを可能にする心理的基盤と捉えることができる。看護は人間の生死に関わる仕事であり、責任も重い。心の安定無くしては、目標を持ったり、向上をしてく気持ちにはなれないと考えられる。自信を持たせる働きかけや、心の安定性を図るようなアプローチが看護師の能力を発展させることになるかと考える。また、西村⁴⁾ ⁵⁾ は、自己教育力の4側面において、「学習の技能と基盤」「自信・プライド・安定性」は、高い相関性があると述べている。本研究も、先行研究と同様の結果が得られ、学びの知識や技能、基礎的な学力と自信やプライドの関連性が示された。新井⁶⁾ らは、主体的な学習の形成になにより求められるのは、主体的な学習を可能にするだけの基礎学力であり、「学習の仕方」に関するものが含まれなければならないと述べている。このことから、自己教育力の形成は、主体的な意思に全面的に委ねられるものではなく、学校教育からの自己教育力の形成を見据えた働きかけが必要ではないかと考えられる。

4. 自己教育力得点と年齢

先行研究では、自己教育力に関連がある要因として、年齢⁷⁾ があげられている。しかし、本研究では、「自己の対象化と統制」「学習の技能と基盤」「合計得点」においては、年齢との相関が認められたが、「成長・発展への志向」「自信・プライド・安定性」は、相関は認

められなかった。これは、「成長・発展への志向」において、成長したいという自己の向上心に年齢は、関係がないと言えるのではないかと考える。また、「自信・プライド・安定性」も年齢との関連性が確認できなかったが、これは看護師に求められる知識や技術には終わりが無く、年齢の高さが、自信やプライドに直接繋がるわけではないことを示唆しているのではないかと考える。

年代の違いによる4つ側面および合計点の得点差では、「学習の技能と基盤」の側面のみで、20代前半と30代後半以上の群で有意の差が認められた。20代前半の看護師は、リアリティショックなどを経験する機会が多く⁸⁾、まずは職場や看護の仕事に慣れることが優先される。そのため、図書館に行く、討議を深めるといった部分の得点が低くなったのではないかと考える。また、20代前半の学習の技能と基盤が低いことについては、病院内の教育資源の活用法やその存在の、周知徹底が十分でないという点も考えられるかもしれない。このことは、今後具体的な介入支援を立案する際のキーポイントになると考える。

5. 自己教育力得点と経験年数

「学習の技能と基盤」「自信・プライド・安定性」「合計得点」は有意水準5%において、経験年数との相関が認められた。しかし、下位尺度の「成長・発展への志向」「自己の対象化と統制」では相関は見られなかった。相関が見られた「学習の技能と基盤」と経験年数の関連性については、経験年数の上昇に伴う看護業務の内容の変化が、影響するのではないかと考える。また、「自信・プライド・安定性」は、年齢では相関が認められなかったが、経験年数とは有意な相関が確認された。原田ら⁹⁾は、経験年数別に看護実践能力を評価し、臨床看護実践能力は、経験を積むごとに高くなっていると述べている。さらに、看護職者の経験については、臨床経験の累積が重要視されている¹⁰⁾。看護は実践の科学であると言われている。看護師の自己教育力の「自信・プライド・安定性」においては、年齢ではなく臨床現場での様々な実践の経験が、大きく影響すると言えるであろう。しかし、「成長・発展への志向」「自己の対象化と統制」は、経験年数との関連性が見出せない。自己教育力得点と経験年数の関連性を全体的にみると、合計得点では経験年数との関係性が認められる。けれど、年齢との比較と同様に、自己教育力の側面によっては、経験年数との直接の関連が見出せない部分があると判断できる。

次に、経験年数による得点の差を検討した。得点の差においては、「学習の技能と基盤」のみ、経験年数による有意の差が認められた。経験年数5年以下と経験年数16年以上の群で差があり、5年以下の得点が有意に低い。本藤¹¹⁾は、役職と自己教育力の関連性を調査し、師長や係長は「学習の技能と基盤」の得点が高く、それは自ら看護研究に取り組み、研修などの指導に当たる機会が多いためではないかと述べている。経験年数の上昇に伴い、指導的な役割をとり、研究への参加・指導の場面も多くなることが予測される。そのため、経験年数とともにスキルが上昇するのではないかと考える。また、経験年数との関連性、経験年数との差の検討の2方向からの検討により、自己教育力は経験年数の上昇とともに高くなる傾向があるが、経験年数の差で見たときは、その合計得点に差はないということが判断できる。これらの結果は、経験年数での継続教育のプログラムが多い中注目すべき点で、経験年数にこだわらず、個人の学習ニーズを十分に反映した教育が必要であることを意味していると考えられる。

VI. 結論

本研究の結果から、以下のような結論を得た。

1. 自己教育力尺度の4側面では、「成長・発展への志向」の平均値が最も高く、「自信・プライド・安定性」の平均値が最も低い。
2. 「自己の対象化と統制」「学習の技能と基盤」は、年齢との相関が認められたが、「成長・発展への志向」「自信・プライド・安定性」の側面は、年齢との相関が認められない。
3. 年代の違いによる自己教育力の得点差では、「学習の技能と基盤」の側面のみで、20代前半と30代後半以上の群で有意の差が認められた。
4. 「学習の技能と基盤」「自信・プライド・安定性」は、経験年数との相関が認められたが、「成長・発展への志向」「自己の対象化と統制」の側面では、相関は認められなかった。
5. 「学習の技能と基盤」の側面では、経験年数5年以下と経験年数16年以上の群で差があり、5年以下の得点が有意に低い。

引用文献

- 1) 松岡みどり (2004) 看護教育・人材育成への期待と展望 教育と医学 52 (2)
- 2) 梶田叡一 (1985) 自己教育への教育 明治図書
- 3) 西村千代子他 (1995) 看護婦・士の自己教育力:自己教育力測定尺度の検討 日本赤十字社幹部看護婦研修所紀要 11 22-39
- 4) 西村千代子他 (1995) 看護婦の自己教育力:卒後継続教育における一年間の変化 日本赤十字社幹部看護婦研修所紀要 10 10-20
- 5) 西村千代子他 (1995) 看護婦の自己教育力:継続教育卒後10年間の卒業生の実態 日本赤十字社幹部看護婦研修所紀要 11 9-20
- 6) 新井郁男,岩崎三郎他 (1984) 人間と教育 朝倉書店 東京
- 7) 永野光子他 (1999) 看護婦・看護師の自己教育力に関する研究:自己教育力と看護婦・看護師特性との関連 第19回日本看護科学学会学術集会 98-99
- 8) 金井篤子 (2004) キャリア危機とキャリアストレス 教育と医学 52 (11) 68-75
- 9) 原田房枝他 (2001) 経験年数別の看護実践能力の評価 第32回日本看護学会論文集 看護管理 324-326
- 10) 上原和子他 (1995) 看護婦のキャリア発達と看護ケアの質について インターナショナル・ナーシング・レビュー 8 (3) 72-77
- 11) 本藤実千代 (1999) 看護婦の自己教育力 職位および経験年数別による比較 第30回日本看護学会論文集 看護管理 156-159